

自ら学び，うんと伝え合う，宇賀っ子の育成 ～思いや考えをつなげて広げる対話的な授業の創造～

下関市立宇賀小学校

梶山 裕貴

1 はじめに

本校では，複式・小規模校の良さを生かし，またそれゆえに生じる課題に対応しながら，日々の授業改善を図り，研究を進めてきた。また，「宇賀型課題対応能力」を定め，①他者を意識した適切なコミュニケーション能力（読解力・傾聴力を含む），②主体的，能動的に学ぶ力，③思考力，判断力，表現力，④自己効力感 が児童に身に付くよう，他校・家庭・地域とのつながりも大切にしている。主体的・対話的な授業を仕組むことで，思いや考えを膨らませ，つなげて広げる深い学びにつながり，「自ら学びに向かう子」「うんと伝え合う子」を育成できるのではないかと考え，一人一授業をとおして全校体制で，ICT機器の効果的な活用にも力を入れていくことにした。以下の項目について，今年度取り組みだことについて報告する。

〈研修項目〉

- ・ICT機器を活用した授業づくり
- ・ICT活用研修
- ・タブレットドリルの活用
- ・複式授業におけるリーダーガイドづくり
- ・ICT活用能力の指標づくり

2 実践事例

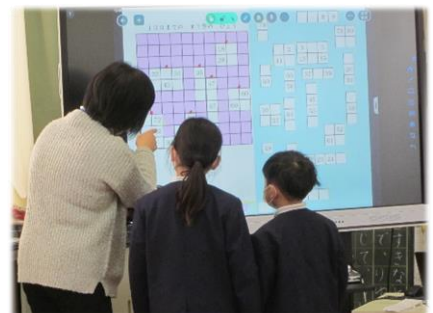
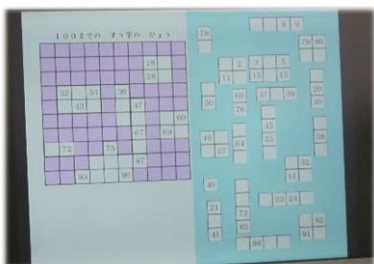
- ・ICT機器を活用した授業づくり

電子黒板，タブレット，書画カメラを教室に常備し，いつでも活用できるような環境の中，学年に応じた活用を行った。

低学年では，自分の発表を相手に話す場面でタブレットの録音機能を活用した。録音することで自分の発表を見直せるため，客観的に自分の発表を確認することができた。話し方の振り返りも行うことができたため，他者を意識したコミュニケーション能力の育成につながると考える。

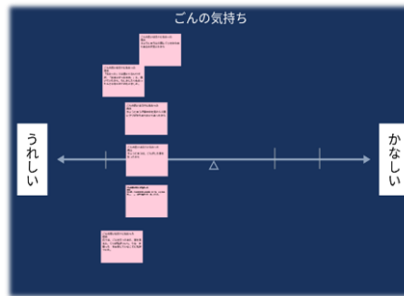


また，算数科の100までの数の数表を作る学習において，ロイロノートを活用して難易度別の問題を作り，児童が自分で問題を選択できるようにした。算数が苦手な児童でも，数字を動かして表を作る活動は意欲的に取り組むことができていた。考えを共有する場面では，電子黒板を活用することで，数構成や数の系列を教師と児童と一緒に動かしながら簡単に確認することができた。ICT機器を活用することで，教材づくりの幅も広がると考える。



中学年では、自分の考えを表現し、伝える場面で活用した。国語科の登場人物の心情について考える学習において、ロイロノートの思考ツール「座標軸」に自分の考えを表現した。座標軸を用いることで、自分と友達の考えの小さな差についても話し合うことができた。話し合いによって自分の考えが変わった場合にも動かしやすく、友達との活発な対話につながっていた。また、自分の考えを書くテキストの色を、内容によって色分けした。そうすることで考えの視覚化につながり、学級全体で共有した際に比較しやすく、対話の活性化につながった。

他にも、ロイロノートの思考ツール「ウェビング」や「ピラミッドチャート」を活用し、考えを広げる手立てとしたり、広げた考えを整理して選べるようにしたりした。他学年でも同単元でウェビングを活用し互いの授業で見合うことで、少人数でも多くの考えにふれることができた。



高学年では、考えを広げる場面で活用した。話し合いを行う際に、ロイロノートの共有ノートを使って考えの共有を行い、質問をしたり考えを比べたりできるようにした。話し合いの中で挙げた意見も共有ノートに入力し、新たな意見もすぐに共有し確認しながら話し合いをすることができたので、考えをまとめる際にも役立った。



・ICT活用研修

教職員が積極的にICT機器の活用に取り組めるように、ICT活用研修を行った。今年度は3回ICT支援員の方に来ていただき、ロイロノートの様々な活用方法やGoogleドライブの活用、電子黒板の使い方などを学んだ。また、校内においてICT活用の復伝研修も行い、教職員同士で情報共有を行った。ロイロノートの資料箱を活用することで、個人が作成した資料を共有することができ、様々な実践共有にもつながった。

・タブレットドリルの活用

2学期からタブレットの持ち帰りに慣れるため、週に1回タブレットの持ち帰りを行い、タブレットドリル学習に取り組んだ。児童は、漢字練習や計算練習などに意欲的に取り組むことができた。また、やまぐちっ子学習プリントは児童に問題を選ばせることで、苦手な単元に挑戦する姿も見られ、主体的な学びにつながると考える。

・複式学習におけるリーダーガイドづくり

来年度の完全複式に向けて、本校独自の「複式リーダーガイド」を作成した。「算数科」、「国語科(物語文、説明文、漢字学習)」の進め方4パターンを作成した。このガイドを基本にすることで、学年や担任によってリーダー学習の仕方が大きく変わらず、学校全体で複式の指導を進めていくことができると考える。

・ICT活用能力の指標づくり

これからの社会において、ICT機器は文房具と同じように当たり前を使い、生活する中で不可欠なものとなる。そのため、学年に応じて児童にどこまでICT活用能力を身に付けさせるかという本校独自の指標を作成した。

宇賀小学校 ICT活用能力の体系表【R4年版】

学年	ICT活用技能①	ICT活用技能②	ICT活用技能③	プログラミング知識・技能	情報モラル・情報セキュリティの理解		
					自他の情報の尊重	ネット上のルールやマナー	情報セキュリティ
1年生	話している人を録画し、再生することで振り返ることができる。	紙に書いた文字や絵・図をカードに写真で撮って、まとめることができる。	タイピングで、1分間に20字が書けるようになる。	学校生活の中の活動を細かな行動に分解し、よりよい順番を考える活動をおこなう。(プログラミング的思考の活用)	友達作品や情報を大切にすること。人に教えるべきではない情報があるということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の受け手として)。	コンピューターを利用するときの基本的なルール。 ・人の名前やアカウントを使わないこと。 ・パスワードを人に教えないこと など。
2年生	話している人を録画し、再生することで振り返ることができる。	学んだことをカードに手書き文字で記入したり、カードを色で分類したりして、分かりやすく説明できる。	タイピングで、1分間に30字が書けるようになる。	学校生活の中の活動を細かな行動に分解し、よりよい順番を考える活動をおこなう。(プログラミング的思考の活用)	友達作品や情報を大切にすること。人に教えるべきではない情報があるということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の受け手として)。	コンピューターを利用するときの基本的なルール。 ・人の名前やアカウントを使わないこと。 ・パスワードを人に教えないこと など。
3年生	活動している相手を録画し、再生することで振り返ることができる。(各教科)	学んだことをカードに文字入力で記入できる。	タイピングで、1分間に20字が書けるようになる。(ローマ字)	プログラム作成の体験。 ・日常生活や学習でのフローチャートの作成・活用	自他の個人情報大切にしないといけないということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の受け手として)・ゲームでの交流。	生活の中で必要となる基本的な情報セキュリティについての理解。 ・ネットワーク上に個人情報をアップしない。 ・よく分からないリンクをクリックしない。 ・問題が起きたら大人に知らせる。 など。
4年生	活動している相手を録画し、再生することで振り返ることができる。(各教科)	友達のカードに自分の学んだことをつなげて、関連付けて説明できる。	タイピングで1分間に30字が書けるようになる。(ローマ字)	プログラム作成の体験。 ・日常生活や学習でのフローチャートの作成・活用	自他の個人情報大切にしないといけないということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の受け手として)・ゲームでの交流。	生活の中で必要となる基本的な情報セキュリティについての理解。 ・ネットワーク上に個人情報をアップしない。 ・よく分からないリンクをクリックしない。 ・問題が起きたら大人に知らせる。 など。
5年生		グループで協力しながら、カードを作ってプレゼン資料を作ることができる。	自分の思いやまとめ等が、3分以内に50～60字で書けるようになる。 タイピング。 ・・・1分間に40字。	プログラムを作成し、ロボット操作等を行う。	情報には権利があるということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の送り手として)・SNSの扱い。	生活の中で必要となる基本的な情報セキュリティについての理解。 ・パスワードの設定。 ・ウイルス対策ソフトの必要性。 ※情報技術が活用された場合の危険性の理解。
6年生		インターネットや他人の情報を参照しながら自分の考えをまとめ、説明することができる。	自分の思いやまとめ等が、10分以内に200字程度で書けるようになる。 タイピング。 ・・・1分間に50字。	プログラムを作成し、ロボット操作等を行う。	情報には権利があるということ。	インターネットを使うときの必要なルールやマナー(情報の送り手として)・SNSの扱い。	生活の中で必要となる基本的な情報セキュリティについての理解。 ・パスワードの設定。 ・ウイルス対策ソフトの必要性。 ※情報技術が活用された場合の危険性の理解。

3 おわりに

○成果

・ICT機器の活用により、自ら学びに向かう姿が多く見られた。また、考えを簡単に共有できるため、複式学級において担任が他学年と学習していても、児童だけで学習を進めることができた。さらに、思考ツールの活用により、考えを可視化することができ、思いや考えをつなげて広げ積極的に対話することにつながっていた。

・ICT機器の活用において、苦手意識を感じている教職員も、ICT活用研修を行うことで積極的に使ってみようという意欲が高まっていた。

●課題

・ICT機器を活用する際、タブレットに意識が集中してしまい他者を意識したコミュニケーションができていないことがあった。話し方について改めて教職員でも確認し、相手を意識したよりよい伝え合いができるように指導していかなければいけない。

・リーダーガイドやICT活用能力の指標は、目の前にいる児童に合わせて改善していく必要がある。

・より深い学びの実現に向けて、思考ツールのより効果的活用に向けた研修や振り返り時間の充実など授業改善を図っていく。